

自分の強みを発揮し、活躍できる帰国生徒の育成

I 主題設定の理由

これからの時代は、社会構造や雇用環境の急速な変化など、予測が困難な時代だと言われている。中学校学習指導要領解説総則編では、「社会の変化に受け身で対応するのではなく、主体的に向き合って関わり合い、自らの可能性を発揮し多様な他者と協働しながら、よりよい社会と幸福な人生を切り開き、未来の創り手となるために必要な力を育む」¹⁾と述べられている。さらに文部科学省は、国際的な産業競争力の向上や、国と国との絆の基盤として、グローバルな舞台に積極的に挑戦し活躍できる人材すなわち、グローバル人材の育成が求められていると述べている。そして、グローバル人材の育成に求められる要素として「語学力のみならず、相互理解や価値創造力、社会貢献意識など、様々な要素が想定されている」と述べている。

そのような中、外国人児童生徒等の教育の充実に関する有識者会議において、「日本語の能力が十分でない外国人児童生徒等は、言葉のハンディから、学習や交友関係の形成に困難を抱えがちである」ことや「子供たちのアイデンティティの確立を支え、自己肯定感を育むとともに、家族関係の形成に資するためには、これまで以上に母語、母文化の学びに対する支援に取り組むことも必要である」こと、さらには「外国人児童生徒等が、複数の言語や文化、価値観の下に生まれ育った経験を活かし、グローバルな視点を持って社会で活躍するような人材となり得ることを重視し、支援を受けるだけでなく、彼らの強みを活かす指導についても取り組むことが期待される」²⁾と、これまで以上に適応教育と、特性^{注1)}の保持・伸長教育、さらには強みを活かす教育の重要性について述べられている。

我が国の帰国生徒教育は、学校生活への「適応教育」に始まり、帰国生徒の特性の「保持・伸長教育」や海外における学習・生活体験を尊重した「異文化教育・国際理解教育」へ、さらには帰国生徒と一般生徒との「相互交流学習」とその重点を移行させてきた。そして、総務省は「グローバル人材育成に資する海外子女・帰国子女等教育に関する実態調査結果報告書」において、帰国生徒の特性の伸長・活用に配慮した教育の在り方について検討する必要があると述べている。また、学習指導要領解説総則編においても、「海外から帰国した生徒などについては、学校生活への適応を図るとともに、外国における生活経験をいかすなどの適切な指導を行う」「他の生徒についても、帰国・外国人生徒等と共に学ぶことにより、異文化理解や共生の姿勢を育てるよう配慮」とあり、帰国生徒の特性を活かす取組の充実が求められている。

そのような中、本校は、1980年、中部地方初の帰国子女学級を開設し、40年以上に渡って帰国生徒教育を実施してきている。開設当初は、帰国生徒の海外生活に起因する学習の遅れを取り戻させ、生活習慣の違いに順応させるという適応教育からスタートした。その中で、海外で身に付けた特性の保持・伸長を図ることや一般生徒との相互交流活動（教科の授業、道徳、総合的な学習の時間、学級活動、学校行事）を通して、様々なものの見方や考え方を働かせることにも取り組んできた。

前研究シリーズでは、「グローバル人材育成に向けての帰国生徒教育ー特性の伸長・活用を促すことを通してー」を主題として、「特性の伸長・活用」に注目し、「特性の伸長・活用」を促すことで、新たな価値を創造し、今生活している環境をよりよくしていこうとする生徒の育成を目指して、取り組んできた。この研究の成果として、課題に対しての解決策を考える際には、互いの特性を活かした解決方

法のよさを認め合いながら、新たな解決方法を考える生徒の姿が見られ、新たな価値を創造することができたと考える。一方、課題として、集団の構成員によっては特性を十分に表出することはできなかったり、表出できたとしても集団の構成員の考えや意見を無視した表出になってしまったりして、集団の中において、特性を適切に活かすことができず、新しい価値を創り上げることができなかつたと考える。その原因は、自分たちの特性を自覚したり価値付けしたりする機会がなかったことにあると考えた。

以上のことから、本校の帰国生徒教育を通して、自身の特性を自覚し、価値付けできるようにする。また、帰国生徒それぞれが外国での生活や異文化に触れた経験を通じて身に付けた見方や考え方を基にグローバルな見方・考え方^{注2)}を身に付け、それらを強みに変える必要があると考えた。さらに学校生活など、様々な場面において今生活している環境をよりよくしていくためにその強みを発揮し、活躍できるようにすることが必要であると考え、研究主題を「自分の強みを発揮し、活躍できる帰国生徒の育成」とし、研究を進めることとした。

II 研究の概要

1 帰国生徒教育部が目指す生徒像

帰国生徒教育部では、目指す生徒像を次のように設定し、研究に取り組むこととした。

自分の強みを発揮し、活躍できる生徒

「強み」とは、価値付けされた特性とグローバルな見方・考え方のことである。帰国生徒の中には在留経験で身に付けた特性を自覚していない生徒や、日本ででの生活を送るうちに特性を日本の生活に適応するために不要なもの、さらには特性をなくしたいもの、と否定的に捉えている生徒もいる。そこで自分の特性を自覚し、価値付けをさせて「特性は帰国生の強みでもある」という意識をもたせていく。さらにその価値付けされた特性のうちの外国での生活や異文化に触れた経験を通じて身に付けた見方や考え方を基にグローバルな見方・考え方を身に付けていく。そしてその発揮した強みが、集団の構成員の考えや意見を無視したものではなく、今生活している環境をよりよくするための新たな解決方法を創造したり、その一助となったりする生徒の育成を目指す。

2 育みたい資質・能力

目指す生徒像を達成するためには、次のような資質・能力を育てていく必要があると考える。

- 特性を自覚し、価値付けられる力
- グローバルな見方・考え方
- 状況を捉える力

目指す生徒像を達成するためには、自分の特性を自覚し価値付け、グローバルな見方・考え方を身に付け、それらを強みにする必要があると考える。さらに、発揮した強みが、集団の構成員の考えや意見を無視したものにならぬように、強みを発揮すべき状況であるかどうかを捉える力も必要になると考える。

3 資質・能力を育むための手立て

資質・能力を育むために、活動の流れの中に以下のような場を設定する。なお、前提として特性を

自覚する段階で在留経験を否定的に捉えている生徒も多いため、表出することを避けようとする生徒も多い。そのような生徒が数多くいるという帰国生徒の実態を踏まえ、校務支援ソフトや帰国生徒ライフブックを用いて、一人ひとりの生徒の実態を帰国教育部の教員を中心として全教職員が丁寧に把握、共有し、支援していく必要がある。また、一般学級との交流(=以下「横交流」)を中心として、交流活動を行う際には、帰国生の特性のうちの否定的な側面によって資質・能力を育むことの妨げにならぬように配慮・支援をしていく。具体的には日々の学習補充を充実したり、交流する際には適切に人数を配分して活動を行わせたりしていく。

(1) 強みにする場

各学年の帰国学級での交流活動(=以下「縦交流」)や日々の学級活動に位置付ける。まず特性を価値付けしやすいテーマを生徒に提示する。そのテーマに対して、特性を自覚しやすくするために自分の考えを「なぜそう考えたのか」を踏まえて言葉で表現させる。次に、その考えを他者に向けてロイロノートなどを用いて無記名で発表させる。無記名で考えを発表させることで、特性を対象化しやすくなると考える。そしてその考えについて、「自分だったらどう考えるか」を「なぜそう考えたのか」を踏まえて意見を述べ合う。そうして意見を述べさせていくことで、外国での生活や異文化に触れた経験からそう考えていることに気付き、特性をより自覚できると考える。さらにその述べ合った意見についてのよさを考え、発表させていくことを通して、特性を価値付けしやすくする。また「自分だったらどう考えるか」について発表された考えを抽象化するような声掛けを行うことを通して、グローバルな見方・考え方を育むことができると考える。

(2) 強みを発揮する場

横交流に位置付ける。まず、目的を活動前(授業の次時の活動予告や活動当日の朝短活など)に生徒に伝える。そうすることで、生徒に何のために交流活動が行われるのか理解させ、見通しをもたせるとともに、安心して強みを発揮できるようになると考える。また、活動の最後に、どのようなことを感じたかを振り返り、ロイロノート等に入力させるなどして共有する。そうすることで、活動中に気付くことができなかつた相手の記入内容を通して一般学級生徒の見方や考え方を知ること、自分の強みと比較し、強みを発揮できたかどうかを自覚することや、強みを発揮できる状況であったかどうかを考えることにもつながると考える。また、強みを発揮できる状況であったかどうかを考えさせていくことを繰り返すことで、どのような状況で強みを発揮することが望ましいかを考えさせることができ、状況を捉える力が育まれていくと考える。

4 資質・能力が育まれたかの評価について

ロイロノートの記入内容や、定期的な生徒への聞き取りにより、生徒が上記の手立てを有効と感じているかを把握し、様々な活動を通して生徒の発言や相手の考えを聞く姿勢に変化が生じているか教師が見取ることで、手立ての有効性を検証する。

5 研究の経緯

本研究は、以下のような計画で研究に取り組んでいる。

年次	研究内容
1年次	<ul style="list-style-type: none"> ・帰国生徒教育研究理論の構築 ・道徳の授業や学校行事を活用した交流活動の実践 ・道徳以外の教科による交流授業の促進
2年次	<ul style="list-style-type: none"> ・帰国生徒教育研究理論、手立ての見直し ・目的に応じた手立ての有効性の検証

3年次	<ul style="list-style-type: none"> ・帰国生徒教育研究理論の確立 ・研究のまとめ

1年次の成果と課題

1年次では、主題を「誰とでも協働することができる生徒」とし、他者の立場や考えを尊重し、目的に応じて自分の考えを伝えるという資質・能力を育むために、学校行事、道徳、交流授業を以前から実施している教科を中心に、強みを発揮しやすくなるような手立てを模索した。

まず、活動の見通しと振り返りについては、交流活動の目的を事前に伝えることで、活動に見通しをもつことができ、安心して交流に参加できるようになった。また、振り返りを行うことで、相手の立場をより意識したり、次の活動で自分の意見を積極的に伝えようと前向きになったりすることができるようになった。次に、交流の形式を帰国生徒と一般学級の生徒の人数をそろえ、協働できるようにした。人数をそろえたことで、活動しやすいと感じている生徒が多かったことが生徒への聞き取りなどからわかった。

相手の立場を尊重することはできたが、自分の意見を伝えることができなかった生徒が一部いたが、聞き取りによると、帰国生徒がグループにいることが心強かったので今後は少しずつ自分の意見を伝えて行きたいと前向きな様子であった。

また、振り返りで、帰国生徒が同じグループにいてもいなくても協働できそうだと感じた生徒もいた。そのため、目指す生徒像により近付けるためにも、生徒の実態に応じて、同じグループに帰国生徒がいない状態で、交流する機会をつくることも必要であると考えた。

6 2年次のねらい

2年次は、生徒が資質・能力を育み、強みを発揮することができるようにするために、手立てが有効であったかどうかを検証していく。

注 1) 本校では特性を「在留国で身に付けた語学力や海外生活によって身に付けた異文化に関する知識・生活様式・行動様式、それらを基に育まれたものの見方・考え方」と定義する。具体的には江淵(1986)、中西(1980)、星野(1994)、松原(1986)などの先行研究において挙げられた①外国語ができる、②国際感覚がある・外国のことへの関心が強い・政治的関心が高い、③異文化体験によるバランスの取れた自文化観と異文化観(文化の相対化)をもつ、④しっかりした自分の意見と批判精神をもつ、⑤自立的生活習慣を備え、忍耐力に富む、⑥積極性・行動力・旺盛な好奇心が顕著、⑦公衆道徳をわきまえ、隣人愛が豊か、⑧対人関係において社交性やユーモアに富み、明朗闊達で率直、などの長所と①集団訓練の欠如、②自己主張が強すぎる(協調親和度が薄い)、③忘れ物が多い、④校則違反を犯しやすい、⑤競争意識の欠如、⑥常識の欠如(年中行事や日本の生活習慣についての無知)などの短所³⁾と同義である。

注 2) 日本や在留国から世界全体や一つの国を見る視点や考え方ではなく、地球単位で世界全体や一つの国を見る視点や考え方のこと。

引用文献

- 1) 文部科学省『中学校学習指導要領(平成29年7月)解説-総則編-』東山書房、2018年、22ページ
- 2) 外国人児童生徒等の教育の充実に関する有識者会議「外国人児童生徒等の教育の充実について(報告)」2020年、4ページ
- 3) 岡村郁子「海外経験によって得られた帰国高校生の特性とその関連要因」2013年 117ページ

(https://www.jstage.jst.go.jp/article/iesj/38/0/38_116/_pdf/-char/ja)

参考文献

岡村郁子 『異文化を移動する子どもたち-帰国生の特性とキャリア意識-』 明石書店、2017年

岡村郁子 「海外経験によって得られた帰国高校生の 特性とその関連要因」 2013年

(https://www.jstage.jst.go.jp/article/iesj/38/0/38_116/_pdf/-char/ja)

渥美育子 グローバル企業で30年間伝え続けた「世界で戦える人材」の条件 PHP ビジネス新書 2013年

早津邑子 『異文化に暮らす子どもたち-ことばと心をはぐくむ-』 金子書房、2004年